

●花房尚作（曾於市在住）

過疎地域には幾つかの成長戦略がある。

ここでは中央集権構造から抜ける成長戦略について述べる。

本当の意味で税金依存から脱却し、経済的な発展と成長を目指すのなら、日本の中央集権構造から外れた方がよい。構造に抗う術は構造から抜けるか、構造を変えるかである。構造を変える力を持つのは権力の中核にいる者たちである。その者たちに変える意識がないのであれば抜けるしかない。

日本の中央集権構造は権限と資本が都心に集まる。都心から遠く離れた地域で出来る政策には限界がある。他の地域と同じ政策で競争していたら、地政学的に人が集まり難い地域は衰退する。日本の中央集権構造が続くと仮定した場合、過疎地域の衰退は今後も進み、その人口規模は確実に減少する。都心から遠く離れた過疎地域が発展し成長する可能性は限りなくゼロに近い。

かつての薩摩藩が討幕を成し遂げたのは密貿易で得た潤沢な資本があったからだ。あえてリスクを取って、江戸幕府の目をかいくぐった結果として討幕を成し遂げた。現在の中央集権構造では密貿易のような裏技の使用は不可能である。

構造から抜けることで独自の政策を打てるようになる。具体的には日本国から分離独立して新国家を樹立する。大切なのは日本政府と敵対するのではなく、良好な協調関係を結び、その他の諸国とも友好関係を広げることである。

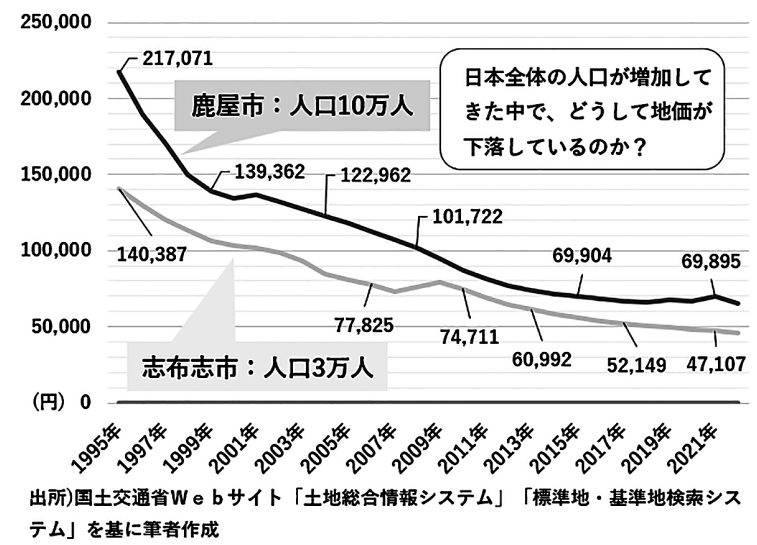
海外にはリヒテンシュタイン公国やモナコ公国のようなミニ国家と呼ばれる小さな国が幾つもある。日本列島にある小さな国家は確実に海外から注目的になる。シンガポールのようにヒト・モノ・カネ・情報などの資本が集まって、東アジアの中心地に成るポテンシャルがある。

ミニ国家では、どのような政策を打つかで目の前の状況が目まぐるしく変わる。何をしても変わらない地域と、何かをすれば変わる地域では住民のモチベーションが大きく違う。日本社会に不満を持つ人びとの受け皿として、日本国内から多くの人びとが移住してくる。

そのうえで、海外からも大量の移民を受け入れて多民族国家を形成してはどうだろう。アジア最大のチャイナタウンやインディアンタウンをつくったら多くの観光客が訪れる。飲食店・衣料品店・雑貨店・カジノ・大麻ショップが建ち並ぶような、彩り豊かな歩道を整備する。

その近くにオフィス街をつくってデジタル産業の最先端地域にする。日本人同士だと「日本人として」という枠に嵌められて、自由な発想が阻害されがちである。大量の移民を受け入れることで、その枠がなくなってイノベーションが起こる。たとえば、移民と高齢者が協力して、高齢者アプリを

### 大隅半島における宅地価格の推移（坪単価）



次々と生み出すような地域は他に存在しないので魅力的である。過疎地域が都心に匹敵する魅力を持つには、都心とは違う魅力を持つ必要がある。

哲学者のジャン＝フランソワ・リオタールは、大きな物語は終焉し、小さな物語に移行すると言う。日本という大きな物語で地域を語るのではなく、小さな地域の小さな国家という小さな物語を地域住民の手でつくりあげる試みはとても魅力的である。

新国家樹立の鍵は、如何にして日本から分離し、どのように独立するかである。過疎市町村として存在しているよりも、モナコ公国のような独立国家として存在していた方が、日本の国益に叶うのではないか。

そのように日本国民に訴えかけて、「それほど独立したいのであればさせてやれよ」という世間の空気をつくりだす。論理的かつ情緒的に説得する知恵と工夫が必要であるし、インド・パキスタン分離独立運動のような、命を捨てるくらいの覚悟もいる。その覚悟を地域住民がどこまで持てるかである。

じつは世界各地で既存国家の枠に収まり切れない人びとが分離独立運動を行っている。スペインのカタルーニャ独立運動を

始め、カナダではエネルギー資源を持つアルバータ州と、穀物地帯であるサスカチュワン州の分離独立運動がある。インドネシアではアチェとパプアの分離独立運動もある。

たとえ新国家樹立の願いが叶わなかったとしても、日本政府に覚悟をみせることで、副作用として地方分権が一気に進む可能性がある。近代までの分離独立運動は、中央集権や民族主義を掲げる政府が武力弾圧していた。現代は国際的な批判を避ける目的から、自治権の拡大によって分離独立運動を抑え込むようになっている。

冒頭で述べたように、構造に抗う術は構造から抜けるか、構造を変えるかである。構造から抜ける選択をすることで、権力の中核にいる者たちに意識変革を促し、構造を変える効果が期待できる。



花房尚作（はなふさ・しょうさく）  
放送大学大学院修士課程修了、人類学修士。米国での2年間の就労を経て、海外40ヵ国、180都市を周遊。専門は、田舎（過疎地域）の研究と、価値観の多様性の研究。大隅半島の現実を伝えた著書「田舎はいやらしい（光文社新書）」で注目を浴びる。連絡先：info@sho39.com